

かたの



R6.11月1日号
形埜小学校
校長室だより

マインドチェンジ

10月26日(土)に行われた学芸会には多数のご参観をいただき、誠にありがとうございました。保護者の皆様には、形埜っ子が一生懸命に頑張る姿を存分にご覧いただけたのではないかと思います。校内学芸会、そして本番に至るまでの練習・準備の過程では、子供たちひとりひとりが、それぞれの経験をしてきました。うまくいったことへの喜び、うまくいかないことへの不安、友達や担任からの声掛けに対する思い…。子供たちは、43人がそれぞれ少しずつ違った思いをもって本番に臨みました。全体としては「頑張るぞ」であったとしても、一人一人で見ると「自分のために」「見に来てくれるお家の人のために」など、それぞれの思いや「こうなりたい」と胸に描いたゴールがあったに違いありません。校長になり、より俯瞰的に学芸会を見るようになったことで、そんな当たり前のことを再認識しました。

私たち教員は、これまで「全体としてのゴール」を重視する傾向があったように思います。「一人一人の目標が達成できるように」といった声掛けはするものの、マインドの中心は「全体としてどうだったか」にあったように思います。自戒の念を込めて振り返れば、私自身、担任をしていた頃には学芸会に情熱を注ぐタイプであり、クラスとしての「劇の出来」に一喜一憂していました。子供たちがそれぞれ思い描くゴールについて考えることや、そういった状態を疑問に思うことはあまりなかったように思います。

もちろん、全体としての目標を掲げ、その達成に向けて努力することは、学校や学級という組織にとってとても重要なことです。しかし、学校教育の目標は子供の人格形成であり、物事を考える際の主語は常に「子供」でなければなりません。それなのに、全体として「こうあるべき」という目標にこだわりすぎることは、主役たる子供の思い「自分が今どうありたいか、これからどうなりたいか」を蔑ろにすることにつながりかねません。常に変容し続け、より多様な生き方がある社会に生きていく子供たちを育てるには、我々教員が、「こうあるべき」に固執するのではなく、子供の「どうありたいか、どうなりたいか」をまず見極め、学校の教育活動(目標)を生かしていかに達成させるかを考えるというマインドチェンジが必要なのです。

ここまでを聞くと、中には「子供のわがままをなんでも認めるのか」と思われる方がいらっしやるかもしれませんが、そうではありません。本校が目指すのは、集団生活を通して規範意識や他者との関わり方を身に付けさせながら、子供たち一人一人の思いや願いを大切に、個別の学びを保証すること、さらには子供が個別の学びを共有することで刺激し合うことで生まれる成長の機会を実現していこうというものです。時には、他の子とは違ったことをしている子も現れます。場合によっては学級の全員がそれぞれ違ったことをしていることだってあり得ます。それこそが、これからの社会に生きる子供たちを育てる「個別最適な学び」のひとつの姿なのです。

「個別最適な学び」という概念はごく最近のもので、私たち大人世代にはなじみの薄いものですが、今後の形埜小の教育は、ここに向かって着実に舵を切っていきます。保護者の皆様にもご理解とご協力をいただければ幸いです。